

日本全国が舞台

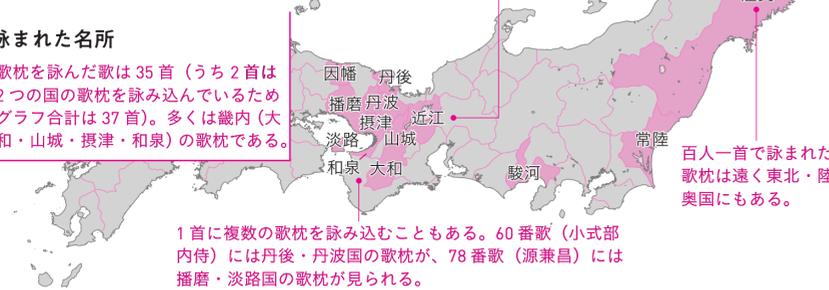
歌人の多くは都人だが、歌の舞台は全国にある。旅先や赴任地で詠んだり、昔から和歌に詠まれてきた名所「歌枕」(16頁)を想像して詠んだり様々だ。



百人一首の歌人には国司として地方を転々と回る官人や、全国を旅した歌僧も多い。そのほか左遷されたり流罪にされたり、いろんな理由で都を離れたのだ。

詠まれた名所

歌枕を詠んだ歌は35首(うち2首は2つの国の歌枕を詠み込んでいるためグラフ合計は37首)。多くは畿内(大和・山城・摂津・和泉)の歌枕である。



和歌のツボは4つの表現手法

百人一首の和歌は「五・七・五・七・七」の短歌。「枕詞」「序詞」「掛詞」「縁語」という4つの表現手法が分かれば、理解がぐっと深まる。そのほか見立て(72頁)、本歌取り(177頁)なども和歌には欠かせない。

似て非なる「枕詞」×「序詞」

	みんなが使う定型「枕詞」	作者オリジナルの「序詞」
例	「しるたへの」は「衣」の枕詞	「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の」は「ながながし」を引き出す序詞
定義	5音からなる定型句で、特定の言葉を修飾するもの	7音以上の句語で、ある言葉を修飾するもの
特徴	・歌の内容には直接かかわらない ・声調を整える、和歌らしくするなど効果があり、呪術的な力を持つとされる	・序詞も修飾される語も作者が決めるオリジナル ・心情を述べる導入の役割を果たす

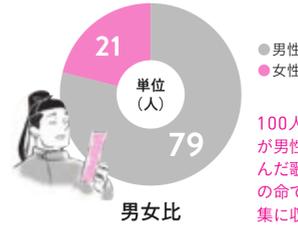
一緒に使うことも「掛詞」×「縁語」

	同音を使った「掛詞」	縁ある言葉「縁語」
例	「まつ」は「待つ」と「松」を意味する掛詞	「ながからむ心も知らず黒髪の乱れで…」のうち、「ながからむ」「乱れ」は「髪」の縁語
定義	同音異義によって、1つの語に2つの意味を持たせ、二重の文脈をつくるもの	ある語と意味の関連する語を配し、表現効果を増すもの
特徴	・2つの意味は「心(人間)」と「物(自然)」の組み合わせになることが多い ・縁語を伴うことが多い	必ずしも訳す必要はない

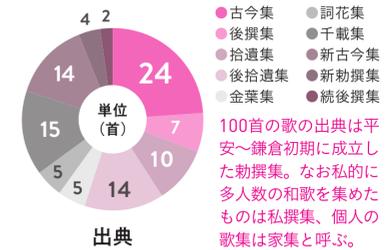


天才歌人が選ぶ100人の歌

『小倉百人一首』(以下、百人一首)とは天才歌人藤原定家(176頁)が古今の男女100人の和歌を1首ずつ選んでまとめたアンソロジー。歌の出典は10の勅撰和歌集(128頁)だ。



100人のうち8割近くが男性。彼らが詠(よ)んだ歌はいずれも天皇の命で編纂された勅撰集に収録されている。



100首の歌の出典は平安〜鎌倉初期に成立した勅撰集。なお私的に多人数の和歌を集めたものは私撰集、個人の歌集は家集と呼ぶ。

時代順に並べ歴史を映す

歌人は時代順に並ぶ。平安王朝の祖となる天皇から始まり、鎌倉幕府に挑んで負けた天皇で終わる。配列にも意図がある。



歌の作者は平安期の人が大半。平安時代は律令期、藤原摂関期、院政期と時期によって「スター」が変わる。百人一首はその栄枯盛衰を記す。

歌人のイメージに合う歌

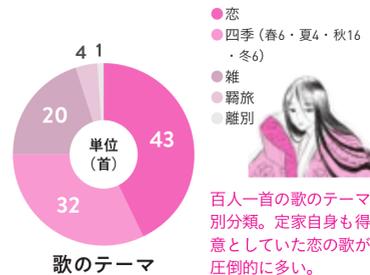
選ばれた歌には歌人の代表作や秀歌でないものもある。後世の者から見て、歌人の人生を凝縮したかのような歌も多い。



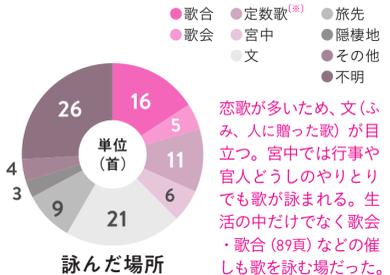
歌人の身分は皇族・貴族・僧など様々。不遇な人生を送った人が多いのも、百人一首歌人の特徴かもしれない。

定家は恋と秋がお好き

出典によれば恋の歌と秋の歌で6割弱を占める。ただし百人一首にテーマ別の分類(部立)やどんな時に詠んだかという前書き(詞書)はない。いろいろな「読み方」が可能だ。



百人一首の歌のテーマ別分類。定家自身も得意としていた恋の歌が圧倒的に多い。



恋歌が多いため、文(ふみ、人に贈った歌)が目立つ。宮中では行事や官人どうしのやりとりでも歌が詠まれる。生活の中だけでなく歌会・歌合(89頁)などの催しも歌を詠む場だった。

※：定数歌とは100首など一定の数を決めて歌を詠む催しのこと。

Column 3 出典となった勅撰集

権威の象徴 勅撰集

歌集には個人の和歌を集めた家集（私家集とも。自撰・他撰がある）のほか、様々な歌人の和歌を集めた勅撰集・私撰集がある。

勅撰集とは天皇・院の命による公的な歌集で、王権の象徴を目指してつくられたため、政治色も濃い。平安時代から室町時代にかけ21集つくられ、「二十一代集」と総称した。藤原定家（176頁）は、そのうち前半の10の勅撰集から百人一首に入れる歌を選んだ。

『万葉集』は勅撰集？

日本最古の歌集『万葉集』を勅撰集とみなしていた時代もあったが、現代では『古今集』を最初の勅撰集と見るのが通常である。



『万葉集』は現存最古の歌集。
4500余りの歌を収録。

『小倉百人一首』の出典となった勅撰集

『古今集』・『後撰集』・『拾遺集』を三代集、それに『後拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』・『千載集』・『新古今集』を加えて八代集と呼ぶ。

名称	成立年	下命者	撰者	百人一首の歌
『古今集』 ^(※)	905年 (913年頃という説も)	醍醐天皇	紀貫之(80頁)・凡河内躬恒(72頁)・ 紀友則(78頁)・壬生忠岑(74頁)	24首
『後撰集』 ^(※)	951年	村上天皇	清原元輔(92頁)・大中臣能宣(102頁)・ 源順・紀時文・坂上望城	7首
『拾遺集』 ^(※)	1007年頃	花山院(?)	花山院(藤原公任(111頁)の説も)	10首
『後拾遺集』 ^(※)	1086年	白河天皇	藤原俊俊	14首
『金葉集』 ^(※)	1126年または1127年	白河院	源俊頼(142頁)	5首
『詞花集』 ^(※)	1151年	崇徳院(146頁)	藤原顕輔(149頁)	5首
『千載集』 ^(※)	1188年	後白河院	藤原俊成(154頁)	15首
『新古今集』 ^(※)	1205年	後鳥羽院(180頁)	源通具・藤原有家・藤原定家(176頁)・ 藤原家隆(178頁)・藤原雅経(172頁)・ 寂蓮法師(160頁)	14首
『新勅撰集』 ^(※)	1235年	後堀河天皇	藤原定家	4首
『続後撰集』 ^(※)	1251年	後嵯峨院	藤原有家	2首

※：名称はすべて『○○集』とあるがこれらは『○○和歌集』の略称(例：『古今集』は『古今和歌集』の略称)。